# Identities and Rugby
# Ⅳ: simple game

Rugby is a strenuous physical contact game.ラグビーは身体接触を伴う激しい競技です。ヒューマニズムに目覚め、文芸復興・産業革命と力強い発展を遂げてきた英国社会の求めに応じて誕生し、目覚ましい普及をしました。strenuous 奮闘的な競技を good, bright, interesting なラグビーに育て楽しむ人々の工夫と努力の歩みはラグビーの identity そのものです。IRB は simple and easier への営みを続けています。

“THE HISTORY OF THE LAWS OF RUGBY FOOTBALL”のLawXIII Mode of Play に次のように記述されています。

| |
|---|
| 1314. In Edward II's reign, a proclamation was issued for-bidding the practice of football ; it was also repeated in the reigns of Edward III, Richard II and Henry IV, as it was a dangerous rival to archery and interfered with the practice of it：there were, also, at times, demands in Parliament for its abolition as it was dangerous to the King's subjects. |

古くから行われてきた foot ball は 1602 年頃には Hurling と呼ばれるようになりました。次のようにその様子が記述されています。

| |
|---|
| In contradiction to this in 1602 there appears to have been a game in Cornwall called “ Hurling ” in which 15 to 30 players on each side took part. The goals consisted of 2 bushes 8 to 12 feet apart, the length of the playing space being 200 to 240 yards. The ball was thrown up, one player caught it ; one opponent was allowed to go for him at a time and he defended him self by “ Striking his adversary on the breast with his doubled fist--called butting. ” “ If the catcher defeats the first onset he is taken in hand by another, and so by a third, till he casts the ball from him--called “ Hurling ”--the object being to place the ball through the opponent's goal. ” |

例えばどのようなボールで戦っていたのかわかりませんが、或る作家は次のように述べています。「この種の運動のボールは一種の魔力のようなものがあり、ボールを捕えた人は直ちに狂人のようになり、彼を捕えようとして周りにやってくる人と戦いもがきました。ほどなく彼はボールを放し、彼の激しさは他の人に移り、彼は直ちに温和な静かな人になりました。」また、或る作家が、「あなたは激しく戦い鼻血を出したりけがをしたり、時には骨折したり、腕の関節をはずしたりという具合でしたが、それらはフェアプレーの中でということなのですから、そのために退場したハーリングの選手をみるだろう。」と書いています。そして、更にこの勇ましい活動的な男らしい競技は人々の勇敢だと称される価値があり、その勇気を生み出すものとして奨励されるべきだと述べています。そういう時代の中で、1823 年ラグビースクールに於いて、画期的な出来事があったことは、自然の流れの中でそれを肯定し進化させていくという時代の要請に応えたものであったのです。

ラグビーは playing the ball と tackle を原型とする running handling game です。playing the ball はボールを蹴る、投げる、持って走る活動で tackle はボールを持って走っている相手を捕えて止める活動です。playing the ball が連続することが面白さの必要条件ですが、tackle がなされると curious situation を生み出します。curious とは奇妙・微妙な詮索をする価値のあるということで、単に hard でも difficult でもないのです。playing the ball が継続するように、curious な状態を解いていくことが大切なのです。それは、good と bright interesting game を楽しもうとする人間の責任です。It was not a bad game ; the greatest beauty of it was that there were no rules. rule より前に大事なことがあるのです。身体の接触を伴う競技で身体の強大だけで優劣を競うことなく contact play からボールの展開を図り流動的なプレー継続の成果としてトライし合うことを楽しむのです。curious situation 解決について“Why The Whistle Went”を通読して「温故知新」ラグビーの楽しみ方を考えましょう。

第 6 章 Playing the Ball

よくよく考えてみると、タックルは curious situation を生み出すということに行きつきます。ランナーA はタックラーB にぶつかって倒れました。両プレーヤーは地上に倒れています。ボールはまだ A の手中にあります。B の両腕はまだ A の両脚に巻きついたままです。A は立ちあがって中断することなく走り続けようと望んでいます。B は A がそうしようとするのを更に力を入れてそうさせないようにする。C,D,E がその場にやってきます。A と B には特に関心を示さず

に、彼らが望んでいるのはボールです。問題なのは多くは品位のないレフリングや掴み合いなしにゲーム継続にスタートさせるにはどうしたらようかということです。

ルールでは次のように解決しています。A はボールを放して立ち上がらなければならない。B はそのようにさせねばならない。（注 A,B がそうすることは equal condition にするということで、ボールを持っていた側が常にボールを持ちつづけるようにはなっていない）誰もボールが放される前にそれを拾い上げようとしてはならない。もう少し細かく言えば、プレーヤーはタックルされて地上に倒れている間にしなければならにことと、してはならないことがあります。タックルされたプレーヤーは直ちに何もしないで、まず第 1 にボールを放さねばなりません。そして、ボールから転退しなければなりません。そして、立ち上がったなら、足または手でボールをプレーすることができます。しかし、立ち上がる前は出来ません。タックルした人はタックルされたプレーヤーがボールを放すのをしやすいように考えてそうしなければなりません。そして、タックルされたプレーヤーがボールを放したら、彼を自由にしなければなりません。

タックルした人は地上に横たわったままで、いかなる方法ででもボールを妨害してはいけません。しかし、その場にやってきた第三番目になるプレーヤーたちは、タックルされたプレーヤーがボールを放す前にボールを拾い上げようとしてはいけません。タックルされたプレーヤーがボールを放したり立ち上がったりするのを妨害してはいけません。ボールが放された時は、彼らは手や足でボールをプレーしてよいのです。以上のように、彼らの間でこれらのいろいろなルールは次のことを確実にしているのです。

タックルの後ボールが放されて自由になりタックルされた人も自由になり、地上に横たわったまま争っている人が誰もいない状態で、両足で立っている人は思うようにボールを自由にプレーできる。ボールを足でプレーに戻さねばならいということはないことを注意しなさい。ボールを直ちに放すことについてもルールはタックルの他の種の場合でも同じように適用されます。ハイタッチの場合、即ち両腕、ボールまたはそれらの両方が身体に押しつけられるように身体の中央部を抱え込まれている時についても同様です。そうなったらタックルされた人は直ちにボールをグランドに落さねばなりません。ボールを持ち続ける（hung up）ことはいけません。

一方掴まえている人は彼がボールを放せるようにしてやらねばなりません。彼がボールをはなしたら、彼を自由にさせねばなりません。その時、ボールは以前のように手または足でプレーされるのです。両足で立っている状態で掴まえられたプレーヤーの周りに何人かの他のプレーヤーが集まれば「ボールを放すこと」は別問題となります。モールが始まったのです。モールはタックルの終了です。

Lying on the Ball

ラグビーでは、するべきことがただ一つしかないという場合があります。それは、地上のボールに倒れ込む（fall）ようにボールに飛び込んで（dive）身体の中央部でボールを抱きかかえる行動です。この場合、あなたの本能は味方ゴールラインまでの間に自分一人しかいなくて、相手 FW が 5 人程いる場合に特に強く働きます。ボールを抱えて眠ってしまったようにじっとしていることが、相手に慈悲深くしない意識と行動を引き出します。そこで、ルールはボールを持つかボールのごく近くでグランドに横たわっている相手がボールをプレーしようとするのに邪魔になるプレーヤーは直ちにボールをプレーするかまたは立ち上がるか、またはボールから転退して邪魔にならないようにしなければならないとなっています。ボールをプレーしようと決めたら、タックルの後のようにボールを放すこと、転退することで、その前に立ち上がることは強制されません。ボールを持って立ち上がって相手プレーヤーの間を駆け抜けてもよいし、タックルされるまで膝ではってもよい。また、立ち上がる前にでも後にでも、足でボールをキックしてもよいし、またパスもできます。（グランド上のボールを拾ってパスすることについてのルールはありません。）しかし、ボールを持って何もしないということはいけないのです。

考察・所蔵

Why the Whistle Went　1973 年版の通訳ですので、現在のルールと異なります。しかし、ボールを持って走る、その人を捕えるという原プレーは変わりないのです。

本文終わりのモール形成についてはモールによるスピーディーな有利性について認識不足がみられます。タックル後双方のプレーヤーが折り重なるようにボールの上、または近くに倒れ込むために直ちに展開に結びつかないケースが多いのはボールを相手にとられないようにするために寝込むことが反則であるのにプレーの流れの中で否定できないプレーとされてしまっているからです。

roll away は死語になってしまっています。直ちに立ち上がることは基本中の基本です。一方、目を転じてタッチラグビーやタグラグビーを見て下さい。ボールを持って人が身体に触れられたら、ボールを直ちに放さなければならないのです。curious な状態を生み出すようになっています。simple で easy です。ラグビーの curious な状態を認めてそれを sportsmanship で解決して

いくことが誇りを持つラグビー精神です。
　反則が多いのは恥ずかしいことです。ルールはタックルがボール展開を中断しないように考えられているのです。双方が平等に公平にオープン展開の継続に努めたらラグビーはもっと楽しくなります。球技で投球が外れる場合 break を使いますがラグビーの場合はボールを取り合って集まってできた集団を解く場合に言いました。break 自体はこわすといった意味にいろいろ使いますが、break down（タックルの後のボール争奪戦）というのはタックルの後、ボールが出ない、展開しない状態になる集団を形成することなく集団を打破し、ボールを味方に有利に展開することで、break down は curious situation　現代版です。flair 発想を生かし bright 賢明に breakthrough 突破する力を創り出しましょう。

“Why The Whistle Went”の原文は以下 URL 参照
http://park21.wakwak.com/~nishikawa_colum/column/PDF/20110911.pdf

2011.11.26
西川　義行